

# 写真展

# 「福島のいま」

写真撮影・収集、キャプション

浜通り医療生協 組織部 工藤史雄

Ver.2021.01

# 第1章 あの日あの時 3.11





2011年3月11日15時38分 津波の第一波が到達。6.7mと推測されている。この写真は、いわき市平豊間の民宿えびすやのご主人 鈴木利明さんが2階屋上で撮っていたもの。



いわき市永崎の大平川沿いにあったJAの倉庫。川を逆流してきた津波によって護岸が崩れ、倉庫が川に転落している。この地域は組合員さんも多いので、夜が明けてから様子を見に行った。あまりの惨状に言葉を失う。



津波被害のひどかったいわき市平豊間地区。引き波で家が流され、住宅の二階部分が川の中に引っ掛かっている。



270 世帯中 250 世帯以上が流失したいわき市平薄磯地区で、津波の来る瞬間まで避難誘導にあたった消防団の車。乗っていた団員は無事だったのだろうか。



いわき市久ノ浜地区に片付けボランティアに入った時のもの。この写真は7月の末。原発から30km. 圏にかかるこの地域は、震災直後退避命令が出たので、住民が全員避難してしまい、片付け作業が大幅に遅れた。ボランティアに入った青年職員と家主さんとで記念撮影。「これでやっとお盆を迎えられます」との言葉に深い感慨。



いわき市小名浜港。300 t の漁船が、岸壁にのし上げて転覆している。





いわき市内の避難所で行われたスクリーニングの様子。撮影者は体育館内に入れなかったもので、ドアの隙間から撮ったもの。画像処理を何回か重ねたので不鮮明になってしまった。3月16日撮影



いわき市岩間地区の様子 コンクリート製の堤防が20m.も飛ばされているのが分かる



小名浜生協病院の断水は1ヶ月間にわたったが、職員と理事さんの軽トラに水タンクを積んで浄水場を往復し、自前で1日20tの水を確保して、病院機能を維持した。



小名浜生協病院の放射線科では、原発事故の直後から放射線漏洩検査用のサーベイメーターで空間線量を測定していた。この日の朝はいわき市内を  $23 \mu\text{Sv/h}$  という濃いプルームが通った時だった。

# 第2章 避難指示下の町で



檜葉町総合運動公園の変遷



2011年10月 この時期はJヴィレッジ前に検問があった。ここから先は20km圏内。許可証をとって、防護服姿でないと入れない。



2012年夏 檜葉町の宝鏡寺住職の早川篤雄さんが一時帰宅した。庭の草が伸び放題で、背丈を超えるほどであることがわかる。



2012 年初秋 金色に輝く檜葉町の田んぼ。稲穂ではなく一面のセイタカアワダチソウだ。早川さん  
撮影





2012年12月 組合員さんが大熊町にある奥さんの実家に一時立ち入りした際の一枚。全身防護服姿、手にはグローブ、靴にも袋をかぶせている。位牌などはスクリーニング場で放射能検査を受けてからでないとは持ち出せない。



2012年8月 一時立ち入りができるようになった檜葉町に入る。臨時の双葉警察署になった道の駅  
ならばでの放射線量は約  $0.6 \mu\text{Sv/h}$ 。



2012年夏 檜葉町の JR 常磐線 草に覆われ、上に架線が走っていなければ、線路とわからないほどになっている。



2012年8月 檜葉町にあるJR常磐線の竜田駅。レールは錆び、線路にもホームにも草が生え、廃線同然。放射線量は $0.7\mu\text{Sv/h}$



竜田駅前のポストは投函できないようグルグル巻きにされていた。このポストは竜田駅が再開した後も、郵便局の集配が再開されるまで、しばらくこのままだった。



2012年 檜葉中学校の昇降口 何回も襲った余震でシューズが飛び出したのかもしれない。この校舎は既に解体され、新しい校舎で授業が始まっている。



檜葉町役場前に立つ「エネエルギー福祉都市」の看板。立地町ではこうしたキャンペーンが盛んに展開されたが、その結末はあまりに虚しい。この看板は現在撤去されている。



2013年3月 檜葉町の国道6号線沿いに設けられた除染廃棄物の仮置き場 檜葉町では地区ごとに仮置きすることになり、町内には23カ所もの仮置き場が設けられた。

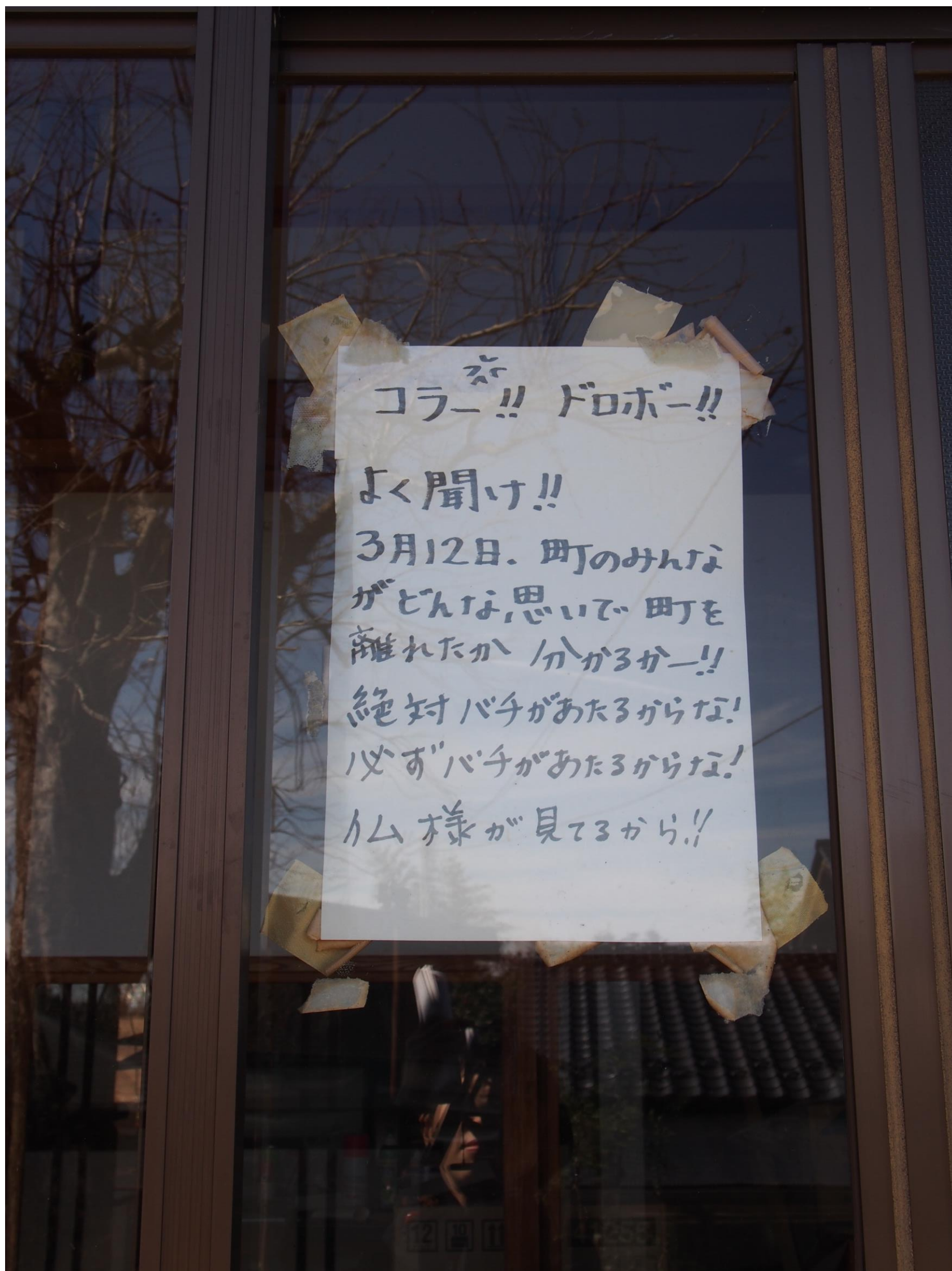




2013年ごろのJヴィレッジ 原発事故対応の最前線となったJヴィレッジでは、総天然芝のグリーンに土壌汚染対策の鉄板が張られ、クレーン車やタンクローリーが停まっている。



2013年富岡町で遭遇したイノシシ 毛並みと耳の垂れ方から、飼育されていた豚と野生のイノシシが交配したイノブタとみられる。人間が来ても逃げようとしめない。



避難指示の出た地域では、ほぼ全ての家が盗難被害に遭った。この年の4月は地デジの切り替えの年だったので、皆テレビを新しいもの買い替えていたため、軒並み盗まれてしまった。

この貼紙は宝鏡寺の早川さんの娘さんが書いたもの。早川宅ではテレビはブラウン管のままだったので盗まれなかったが、2階の寝室の思い出の品などが荒らされてしまった。



竜田駅前の酒屋の自動販売機もバールでこじ開けられていた。中に缶チューハイなどが残っており、つり銭狙いであることが分かる。避難区域では自動販売機が軒並み荒らされた。



宝鏡寺の本堂に、1968年1月1日付の福島民報が貼ってある。第二原発の誘致が発表された時のもので、早川さんが保管しておいたもの。「楽しめる相双地区の将来」の43年後に待っていたのは原発事故だった。



浪江駅前の新聞店には、配達できなかった3月14日付の朝刊が積まれていた。この新聞は、2017年に浪江町の避難指示が解除され、営業再開するまでこのままだった。



双葉郡は地形的に米作に向かず、酪農を営む農家が多かったなので、避難の際に取り残された牛たちが、離れ牛になった。私たちが遭遇したこの牛も警察か自衛隊に回収されたのだろう。



2013年3月に富岡町が帰還困難区域と居住制限区域、避難指示解除準備区域に再編され、日中だけなら町内に立ち入りができるようになると、帰還困難区域との境に検問所が設けられた。





富岡町に立ち入りできるようになってすぐに現地に入った際の写真。帰還困難区域の検問所では  $6\mu\text{Sv/h}$  を超える数値を記録した。線量計のブザーが鳴りっぱなしで、恐怖を覚えた。2013年3月



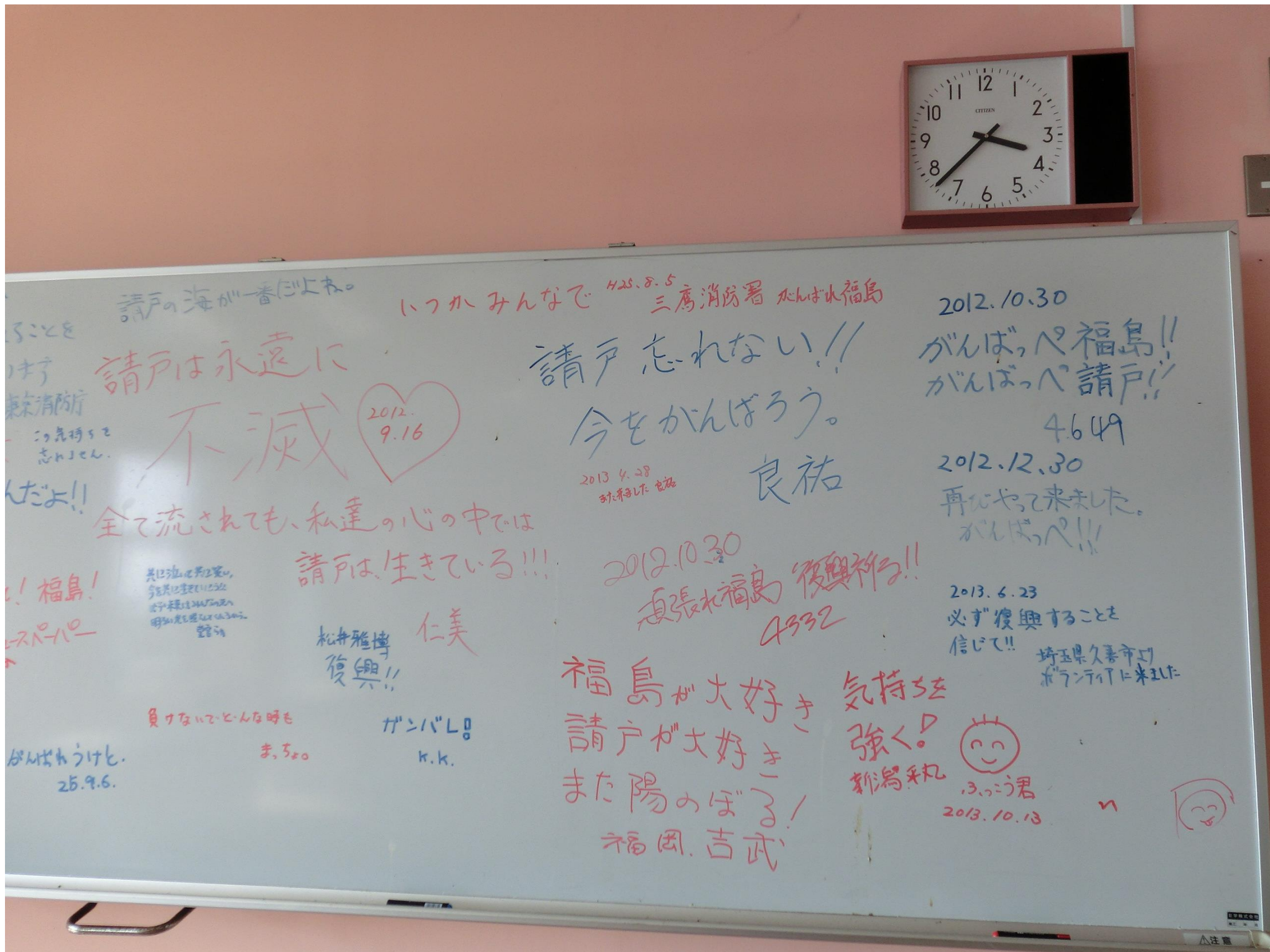
帰還困難区域の検問所から出てくるのは、福島第一原発での作業を終えた作業員たち。バスの運転手も含めて全員が防護服にマスク姿。彼らはJヴィレッジに着くまで防護服を脱ぐことができない。



2013年3月 富岡町役場の駐車場で 除染前なので放射線量は $3\mu\text{Sv/h}$ 以上ある。現在は除染され、アスファルトも一部張り替えられ、この場所で業務を再開している。



富岡町夜ノ森 原発事故による分断を象徴する一枚。同じ町内で、この路地を挟んで向こう側は帰還困難区域なので、許可証がないと入れない。



浪江町の請戸小学校の校舎に残っていたホワイトボード 卒業生とみられる書き込みが残る。これらは今は取り外され、会津若松市にある福島県立博物館に、震災遺構として保存されている。



JR 常磐線富岡駅 2013 年 3 月 特急の停まる駅だったが、海岸から 500m ほどしか離れておらず、津波によって駅舎は完全に流失してしまった。駅員と乗客は高台に避難し、無事だったという。



富岡駅前の日本家屋の今には、津波で流されてきた軽トラックが突っ込んでいた。富岡町を襲った津波は約21m。町内では24人が亡くなった。



富岡駅前の商店街にあった美容室の時計。2時46分で止まっているので、地震で止まったものであることがわかる。時の止まった町を象徴する1枚。この時計は現在福島県立博物館に収蔵されている。





檜葉町では2,400世帯のうち1,200軒が解体だという。解体された家屋は鉄、ガラス、瓦、土砂、木質、家電など全部で19種類に分別され、素材ごとに積まれていく。ここは畳の山。



いわき市会議員 渡辺博之さんといわき市労連が立てた看板。労働者に向かって「NO 原発」と言っても響かないが、「危険手当もらってますか？」の一言は効く。作業員にまっとうな労働環境が提供されなければ、まともな廃炉はあり得ない。それは即ちいわき市民の安全にも係わる。



富岡駅前には、巨大な仮設の破碎選別施設（シュレッダー）と減容化施設（焼却場）が作られた。町内から大量に出てくる除染廃棄物を破碎して材質ごとに分け、燃やせるものは燃やして量を減らす。

# 第3章

## 避難指示区域のいま 2018→

### ～復興の光と影～



富岡町夜ノ森の桜並木 NHK が放映したテレビ画像を撮影したもの



JR 常磐線富岡駅は 2017 年 10 月 21 日に営業を再開した。この写真はニュース映像から。ここから帰還困難区域内の夜ノ森、大野、双葉の 3 駅 4 区間が不通のまま。

乗降客のほとんどは復興関連工事関係とみられるビジネス客で、たまに地域住民とみられる高齢者がちらほら。常磐線の終着駅とあって鉄道マニアもよくやって来る。



元の庁舎で業務を再開している富岡町役場には、町民の作った震災前の富岡駅の模型が置いてあった。震災前の姿を知ることができる。



再建された富岡駅の頭上では、巨大な橋の建設が進む。海岸を通る県道と高台を結ぶ「津波避難道路」。道路を作るためならどんな理屈でも通してしまう。



富岡町の減容化施設＝焼却場 町内から大量に出てくる除染廃棄物のうち、燃やせるものは燃やして容積を減らし、扱いやすくする。煙突部分にフィルターがついていて放射性物質を漏らさないようになっている。環境省のマークを挟んで鹿島建設と三菱重工。除染作業がゼネコンの稼ぎ場となっていることを象徴する一枚。





富岡町役場前の田んぼには、原子力研究開発機構の廃炉国際共同研究センターが建設された。「イノベーションコースト構想」によって、双葉郡内にはこうした施設が次々と作られている。



2018年4月に富岡町役場前に、県立ふたば医療センターの附属病院がオープンした。内科と救急科の10床のみだが、これでようやく、この地域で夜間・休日に救急車の受け入れができるようになった。



広野町と檜葉町にまたがるJヴィレッジには、JR常磐線の新駅「Jヴィレッジ駅」がオープン（2019年4月）。建設費は16億円とも言われるが、イベントのある時だけ開業する臨時駅。オリンピックを見込んでのことだろうが、今後この維持費が町の財政を圧迫するのは目に見えている。2020年には常設駅となり、毎日誰もいないホームに電車が停まる。



事故後は原発の復旧作業の拠点だったJヴィレッジは、2018年7月に営業再開。11面あるサッカーコートは芝を全て張り替え、除染され、今の放射線量はいわき市内と変わらない $0.05 \mu\text{Sv/h}$ 。  
写真は新たに完成した全天候型屋内練習施設。サッカーコートがすっぽり収められている。これの建設費は20億円とも。



橿葉町の総合運動公園には、温水プールやフィットネスを備えた「ならはスカイアリーナ」がオープンした。大型施設が次々と作られているが、今後これらの維持費で町の財政がパンクするのは必定。かつて原発によって手に入れたあぶく銭で狂わされたのと同じ道を歩んでいるようにしか見えない。



長らく双葉警察署の臨時庁舎として使用されていた「道の駅ならは」は2019年4月に再オープン。その片隅に、原発の交付金で作られた施設であることを示す看板がある。立地町では、ちょっとした施設には大概こうしたお金が使われている。



檜葉町の仮置き場。フレコンバックに詰められた除染廃棄物を中間貯蔵施設に移送する作業が終わり、元の田んぼに原状復帰中。2019年8月撮影



第2章で仮置き場となっていた場所の現在の姿。大量のフレコンバックは、既に3年前に別の仮置き場に移送されていたが、2019年から米の作付けが再開された。





檜葉町の広大な仮置き場の一角に、一枚だけ作付けした田んぼがある。50代夫婦が、「ここでもう一度お米を作るんです」と、石拾いを続けていたもの。津波で大量の土砂が流れ込んでしまい、石だらけになっていたのを、2015年に檜葉町の避難指示が解除になってから、ひたすら石を拾い続けて、ようやく今年(2019年)再開できた。



富岡町の回転寿司店は、震災当日のまま。レーンにはお皿が乗ったまま、テーブルには湯飲みや小皿がひっくり返ったまま、9年間時間が止まっていたが、2020年夏ついに解体された。



富岡町の中学校の体育館。3月11日は卒業式の日だった。その片付けが終わらないうちに巨大地震が起き、近隣住民の避難所となる。事態はその後原子力緊急事態に。次の日の朝にはバスが迎えに来て、全町避難。以来ここは時間が止まったままだ。あの日は寒い日だったので、ストーブを持って来たり、具合の悪い人がいたのか、保健室のベッドを持ち込んだりしている。ステージには電気ポット、奥には缶詰や乾パンの缶もそのまま残っている。ここも2020年夏に解体された。



常磐道に大熊インターができ、帰還困難区域内の国道6号線とインターチェンジを結ぶ県道が通行できるようになった。その県道沿いにあるのが、かつての県立大野病院。この地域の基幹病院だったが、第一原発から5km圏内で、壮絶な避難を経験する。停まっている車はいずれもその時から置きっぱなしのもので、ナンバーも外されていた。



浪江町の半分ほどで避難指示が解除されたのは2017年3月末。現在は1,500人余りが町内に居住している。

しかし、元の生活を取り戻すにはまだまだ課題が多い。

このしまむらは除染作業員の現地集合場所となっている。ここに作業員が集合し、その日の作業現場へと散っていく。壁面のゼネコンの名前は除染の元受け。2019年8月撮影。先日訪れたら、しまむらの看板も取り外されていた。



2019年4月に大熊町の一部で避難指示が解除された。大熊町は面積的には約半分、人口比では95%が帰還困難区域に当たっていて、帰還するには、新しい町を一から作らなければならない。

写真は解除された大河原地区に新たに作られた町役場。ここはもともと田畑で、そこに町役場を中心に復興公営住宅や診療所（予定）を建設して、帰還する意思のある住民が帰れるようにした。2019年11月現在の帰還者数は101世帯119人。



新しい大熊町役場に隣接して、作業員宿舎が並んでいる。以前のようなプレハブ造りではなく、森の中にさながらリゾート施設のような趣。写真はその一角にある大熊食堂。作業員に3食を提供するほか、ランチの時間は一般客も利用できる。この地域では営業している飲食店が少なく、被災地の視察に訪れた人たちにとっても貴重な食事場所。町役場の新庁舎もすぐ近くなので、町の職員もよく利用している。大熊町にはこうした作業員が800人以上生活している。



浪江町役場にある相談窓口。浪江町役場も元の場所で業務を再開しているが、職員の多くはいわき市などの遠方からの通いか、町内で単身赴任し、週末自宅に帰る生活。

避難指示が解除されても、放射線への不安はもとより、スーパーや病院は開いているか、仕事はどうか、近所の人は戻ってきているかなど、様々な課題があり、そのいずれか一つでも解決しないと、帰還は難しい。2019年撮影



# 第4章

## この1年～コロナ禍でも粛々と～





檜葉町の天神岬公園から望む。眼下には以前広大な除染廃棄物の仮置き場が広がっていたが、2020年現在、その範囲はだいぶ小さくなっている。画面奥は東京電力広野火力発電所。天神岬公園にはかつての姿を映した写真もある。ここを10.5mの津波が襲った。



列車の運行が再開した富岡駅から500m.ほど行くとすぐに海岸に出るが、そこでは巨大な堤防の工事が進められている。南を振り返ると、廃炉が決定した東電福島第二原発が3km.先に見える。



大熊町の帰還困難区域内では除染作業とともに、解体工事も進んでいる。このお宅もこれから解体されるようだ。2020年9月撮影



富岡町夜ノ森は2017年にすでに避難指示が解除されていたが、ほとんどの住宅が解体されてしまったこともあって、帰還して元の場所に住んでいるのはほんの数軒だった。そんな夜ノ森で、歯科が再開するとの張り紙を発見した。再開予定は2020年4月。この写真は2020年9月の撮影で、せっかくの再開もコロナで延期になってしまったが、12月についてオープンした。院長はもともとここで開業していた方。郡山に避難し、既に郡山で再開していたが、通いでここを開けることにしたという。



2020年3月14日にJR常磐線が全線開通し、帰還困難区域内にある夜ノ森、大野、双葉の3駅も、駅の周辺だけ避難指示が解除された。ここは夜ノ森駅前。駅に行くための道路の部分だけが解除されているが、道の両側はバリケードで塞がれていて、立ち入ることができない。



同じく駅に向かう道路だけ解除になった富岡町夜ノ森。バリケードの隙間から空間線量計を差し込んでみると  $0.3 \mu\text{Sv/h}$ 。自分のいる道路上では  $0.1 \mu\text{Sv/h}$  以下なので、明らかに違うことが分かる。除染の基準は  $0.23 \mu\text{Sv/h}$ 。



大野駅東口のロータリーに隣接する公園。道路上は避難指示が解除されているが、私の立つバリケードの向こう側の公園は立ち入り禁止。なんとも珍妙な解除の仕方。「除染が終わって、さあ帰還しましょう」ではなく、あくまで駅に電車を通すために解除したということがよくわかる。普通列車は停車するが、当然この駅で乗降する乗客はいない。ちなみに、除染は終わっているらしく、この時の線量は $0.2\mu\text{Sv/h}$ だった。





2020年9月20日に、町のほぼ全域が帰還困難区域となっている双葉町に、「世界初の甚大な複合災害の記録や教訓とそこから着実に復興する過程を収集・保存・研究し、風化させず後世に継承・発信し世界と共有する」ことを目的にした「東日本大震災・原子力災害伝承館」がオープンした。画面右が「伝承館」左は「双葉町産業交流センター」

大地震と巨大津波は自然災害だが、福島第一原発の事故は単なる自然災害ではなく、企業活動に伴う“人災”であり、国の政策と企業活動によって引き起こされた“公害”であると私たちは考えているが、“原子力災害”のネーミングからも認識の違いが分かる。



双葉町では「東日本大震災・原子力災害伝承館」の敷地部分だけは避難指示が解除されたが、それ以外は帰還困難区域のままとなっている。画面奥が国道 6 号線や双葉駅のある街の中心部で、表側から入るとわからないが、海側から入ってくると周囲には津波で流されたがれきがそのまま残されていた。この日は菅首相も伝承館を訪れていたが、首相の乗ったバスからは見えない位置にある。

「福島の間」を端的に表す一枚。2020 年 9 月 26 日撮影



浪江町の請戸漁港。まだ試験操業中とはいえ、現在では魚種の制限もなく、400種類以上の魚が獲れる。2020年になって魚市場も再開し、震災前ほどではないが、たくさんの沿海漁船が停泊している。画面奥に見えるクレーンや煙突は、事故を起こした福島第一原発。ここに汚染水を放出されてしまったら、漁業の再興に計り知れないダメージとなる事は必至。2020年11月撮影

# 「私たちは福島を忘れない」

この写真展のデータを提供します。

各地でこの写真展を開催してください。

Word のファイルをプリンターで印刷すればいいように作っております。

CDで郵送するか大容量転送サービス(Dropbox)で送ります。全頁でも何枚か選んでも可。

「福島の間」を伝えることが、「福島を忘れない」ことにつながる、

そしてそれが、「原発ゼロ」への道だと考えています。

どうぞご連絡をお待ちしています。

浜通り医療生協 組織部 工藤史雄

Tel:0246-92-3099

Fax:0246-92-3105

E-mail:kudou@hamadori-coop.jp

または kudo@outlook.jp

2020 年初頭にこの写真展の第 1 章～第 3 章をまとめ上げ、医療生協や民医連などのルートで呼びかけたところ、全国から 20 件余りの問い合わせをいただきました。そこで、東日本大震災と福島第一原発事故から間もなく 10 年を迎えるのに合わせ、この 1 年の写真を第 4 章として追加しました。皆さんには「福島の間」を全国に発信するお力添えを頂ければ幸いです。